

ふるさと検定 八幡塾《探訪考証編》

郷土の伝統・文化を学ぶ 法海寺大百科(最終回)



法海寺は八幡の全住民によって
お守りしています

法海寺に三重塔があつたと伝えられていることを、ご存じだろうか。本堂に向かつて右手の庚申堂と十王堂の間に石柵(写真下)に囲まれて、花崗岩でできた三重塔心礎の石(写真左下)が保存されている。どこに建っていたのか、どれくらいの大きさだったのか、どの時代まで存在したのかなど記録は一切ないので、大いなる謎のまま語り継がれてきた。故圓浄先代住職は、この塔の復元に並々ならぬ情熱を傾けておられた。いつの日か夢の実現を、今でも心待ちにしているのではないかと偲ばれる。

法海寺の具体的な遺物による研究は、大正三年に本堂裏の路上の一角に露頭していた遺瓦の採集にはじまる。この「変形蓮華文軒丸瓦」の年代が平安時代前葉の資料に比定されていた。

そして法海寺について学問的かつ総合的に取り組んだ最初は、名古屋郷土研究会(当時)の人々であった。それ以降は左表に示す調査・発掘が行われ、多数の遺瓦(写真下)が採集された。昭和三三・三四年に伽藍地の一角で発見された瓦溜りの調査資料と昭和四八年境内に八幡福祉会館を建設するに先立って行つた調査で出土した資料により、法海寺の創建は白鳳時代に遡ることが明らかになった。

法海寺の主な遺物調査事例

1. 昭和18年
名古屋郷土誌研究会(当時)の实地踏査
2. 昭和30~35年
八幡町史編纂委員会調査・杉崎章氏ほかによる調査
3. 昭和48年
八幡福祉会館建設予定地発掘調査
4. 平成3年
境内遺物・貝塚及び本堂跡発掘調査

